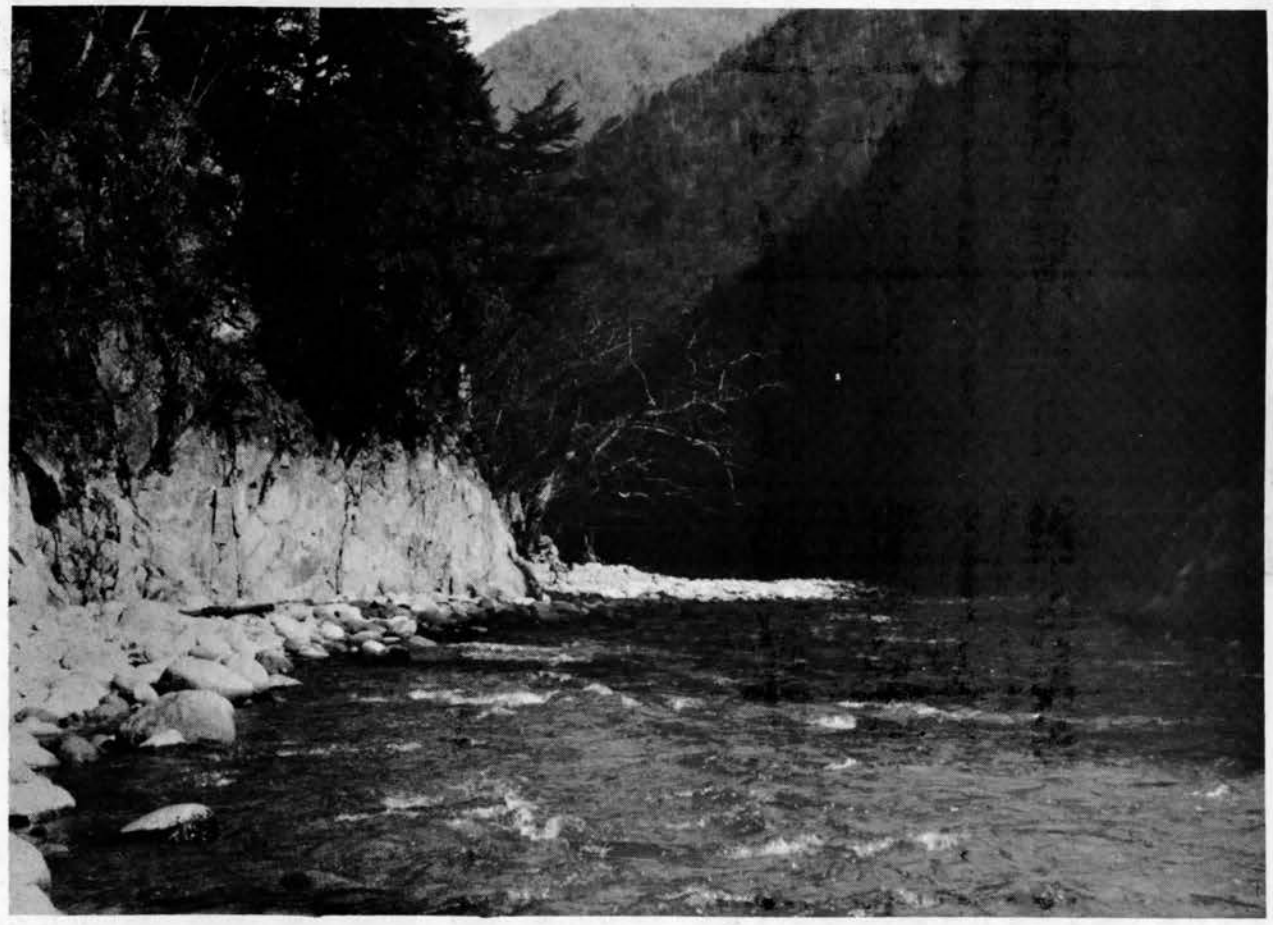
山と博物館

第16巻　第10号　1971年10月25日　大町山岳博物館



高瀬渓谷　1971年10月　撮影　海川庄一

奥地開発には公聴会を

幾千万年の時間をかけて自然が生みだしたすばらしい渓谷〝高瀬〟、全山紅葉に飾られたこの谷あいに、いま連日発破の砂煙が上る。

高さ一七六メートルの大型ロックフイルダムを築く東京電力の高瀬川再開発工事が始まったのだ。

人災か天災かと言われた一昨年の大水害の傷跡が、自然の治癒力によってようやく癒え始め、花崗岩の白く美しい河床が復元して来た矢先、両岸のみどりを剝がし山肌を削って岩を盛り上げる奇型化大手術が施されつつある。ダム化してしまえば渓谷の価値は半減する。そして、ひと度傷つけられ、原始の魅力を失った自然は、守るに値しないものとみなされ、とめどもない破壊が続発する危険がある。黒部、双六、高瀬とうたわれた中部山岳国立公園の三大渓谷は何れも同じ運命をたどった。遂に一つの渓谷をも守り得なかったのだ。そして、すべては開発側だけのプランによって進められ、工事を許可した後で、企業から金を出させて学者を動員して水没地域の調査をするというような立おくれた行政の中で、美しい郷土の渓谷を惜しむ庶民の声は、やがて消えゆく高瀬の瀬音と共にいつしか遠ざかって行くのだろうか。

自然公園法によれば、渓谷の景観を著しく損うような行為は本来不許可にするべきであるが、許可・不許可の基準は法に定められてなく、すべては国の行政機関の判断にまかされている。したがって許可することによって実現する利益が大きい場合は、今回のように公園の景観を破壊し、地域の住民に不安をもたらす行為でも許可されるわけである。だが、経済目的だけで国立公園を破壊してよいものかどうか。国土保全の上からも議論の分れるところである。

これらの問題を慎重に進めるために国には自然公園審議会という制度があるが、高瀬の問題が審議会にはかられたという話を聞かない。こうした中で、今後必要なことは、開発工事に許可を与える前に科学的な調査をすることや、事前に地域の住民の声を聞く公聴会制度を確立することである

（海川庄一）

山・道・みどり

＝「庶民の森」を育てよう＝

山崎林治

信州でも今は盛んに山に車を走らせようとしている。『山の上こそ歩行者優先でなければならない』と叫んでもかえりみられないこのごろである。それだから人里近く熊がでたと大さわぎがおこることもあるが　これが小鳥であったら喜ばれるであろう。現に公の席上で得意になって『木を伐ったら別荘地にウグイスがなくようになった』といっていたある高官の言葉をきいたことがある。しかしこれは束の間の出来事で　動物が住み家を失って異常な移動をおこした結果で　絶滅の前提であることを考えなければならない。

山は美しい緑におおわれて　静かであるべきもの。山国に育っている住民の心に泌みついて　いつとはなしに「心のふるさと」として刻みつけられていることは否定できない。開発の名のもとにこの静けさをやぶり　山肌を傷だらけにして　動物を追い出している人間ども。自分も動物の一員であることを忘れてはならないし　森林はその一部が傷つけられても全体の機能が失われるものだということを認識しなければならない。

このごろ郷土をかえりみる人が少くなったという。異郷に出た人たちが郷里に帰って削られた山肌に肝をつぶし　一木一草他郷で見て来たものと変りなくなっていることにおどろき　昔から伝えられた行事は失われ、ただ人まねの風物詩のみに心をうばわれている姿に郷愁を失ってしまったこともあろう。

私は冠着山の南麓の小閑村に生れ育ったものであるが　子供ごころに眺めてきた冠着山は美しかった。さほど山が高いでもない。森林資源にとんだ山でもない。特殊な草や木をみたわけでもない。ただあの急な山肌の斜面に傷一つなく緑が茂って四季折々の変化があって飽くことのない山であって、これが私の心に泌みついていたまでのことである。

啄木の詠んだ

ふるさとの山にむかいて言うことなし
ふるさとの山はありがたきかな

こんな心境に全く共感をいだいていたものである。ところが今郷里に帰ってみると　あの美しかった山肌のド真中に道が切り開かれ　赤ちゃけた土肌が幾条も走って　昔のおもかげは更にない。山は真二つに分断され高さを失ったかに思われる。聞けば慾にからんで車の走れる道をつくったのだという。それも一キに土砂をおし流して　時に車だけ通ればそれ以外はかえりみない急速な道路づくりをして見る間に出来上ったものだというが　今その道は殆んど使われていないという。おそらくもとの登山路は失われているにちがいない。この無慚な姿をみて　一ぺんに私の心のふるさとは失われた。

このようなところは県内にいくつも見られる。例えば志賀高原では横手山の赤ちゃけた土砂の露出部を写真にうつして観光宣伝のパンフレットに堂々とかかげている。この無神経さにもおどろく。

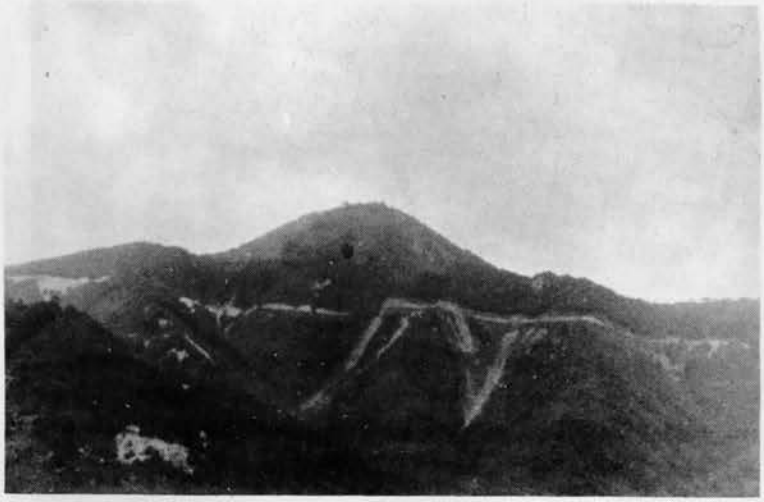
また白樺湖は高原の湖というキャッチフレーズで売り出したのに　旅館の周辺にはゴミが山積し大きな蠅がとびまわっている。勿論湖の水もこのために年毎に汚染を増し　水辺は建物に占據され　ただ都会の一部を山の上に持ってきたという印象以外に何も残らない騒々しい歓楽地に化けてしまっている。その上　高原の美しい草花を尻目に　移入種を植え込んだ不調和な花壇。なぜここの野に咲く花を育てないのだろうか。車山の東面は美しかった山肌が幾条かの道とリフトさえ出来傷だらけで目もあてられない。

広さをほこった霧ケ峯の　ゲイロッパラ（蛙原）も昔のおもかげはなくなった。真中が道路で切られたまでは我慢ができたが　そこに駐車場ができ　大型バスがぞろりと並び売店までのさばり出して　原ッパの半分はこれらで占據されてしまったので見通しも何もない。その上美しかった高原の花は帰化植物のヒメジョン類やヒロハウシノケグサに優先されてしまっている。霧の多い日ここを通れば　東京郊外の川土堤を歩くと変りない。これも車優先の落し子である。また八島湿原から和田峠への道ともなれば全線殆んどがコンクリートの壁の間をぬって走ることになっている。産業道路なら止むを得ないが　これが観光道路であり山岳道路だというからあきれる。ただ車で走り廻る快感を覚える人か　山の道路に好気心をもつ人がくる所で　二度と訪れようという気にはなれないところとなった。『お客さまの質がかわりました。高原に腰をすえて味ってくれる人が少なくなりました』と旅館ではなげいている。

乗鞍岳の登山道にいたっては自然破壊の模型みたいなもので目もあてられない。道の両わきにも緑がみられない状態である。このように県内到るところの自然はもう土地の人々は見むきもせず、何も事情を知らない外来者ばかりということになりそうである。

次に気がかりなのは　今の人は歩くことを忘れているのではないかということである。『日本の山は下草が美しいからワラジをはいてふみしめて歩いてその味がわかる』と吾々は教えられてきた。昔の人の作った道は生活の知恵から生れたもので　距離的に近い上に自然をたっぷり探勝できるところを通っている。今の車道に歩道を並設しても　それはあまりにも遠廻りになり　その上車の騒音におびやかされ危険からのがれることで勢一ぱいで山を味うどころではない。昔の道を歩こうとすれば　それは荒れ放題　その上車道で寸断されて道は失われている。昔の健脚をほこったものも止むを得ず車ということになったのかもしれない。私はこのごろ　山の宿で開かれた中年のクラス会に同席した。そのあと半日（二時間位）山歩きを楽しもうということになったが、帰るとその殆んどが脚をさすっているのにおどろいた。人間は脚から老衰するというが　こんなにも中年の老人が多くなったことになげかわしく思った。身体的にも精神的にも歩くことの必要性を思い返した。

近ごろ県内各地に『いこいの場』とか『レクリエーションセンター』など住民の目をひく施設が流行している。いずれも山の中か、



今の冠着山

山の頂上にあるといってもよい。大殿堂の近代施設をほこりとして人を集めているが、自然を考慮したものは少ない。内部は大同小異その土地の持味を生かしたものはない。せめて周辺の自然を充分に生かして　その土地独特の持味のものにしてほしいものである。ただの歓楽施設で健康的な要素の見られないことは残念である。この上をゆく施設に『住民の森』という計画も見られる。山の森林を開放してキャンプなど奨励しょうというものだが　これにも前者同様車道の整備はしても歩道や自転車道がみられない。林の中に電線を張りめぐらしてコンクリートの大殿堂建設に余念がないなど目的のはきちがいはないだろうか。折角のキャンプ指定地もコンクリートの壁におされ　夜になったらこの灯火におびやかされては雰囲気も何もなくなるではないか。ある官庁では休養林と称して森林を開放し小鳥を楽しんでもらおうと計画し　針葉樹林を見せようと入口の駐車場に落葉樹を植えこんでいるところもある。その上念入りにレコードで民謡や小鳥の声を流していた。また木をきりブルで地ならしをしてキャンプ指定地を造成しているところ、これで原始生活が味えるだろうか。今でさえ土地の人はもうふりむかなくなってきている。

高遠公園のコヒガンザクラ

自然保護教育が図にのりはじめている。これが徹底してほんとうの自然を理解する人が多くなったら　こんなところをふりむかなくなるばかりか　先人の非をののしられる時がくるであろう。

近代文明が進めばすすむほど原始景観とか原始生活が要求されることは明らかである。近くの緑が失われ奥へ奥へと足をはこばなければならなくなり　車も止むを得ないことになる。しかし心臓部まで車で乗り入れては　もともこもなくなる。車は目立たないところを通して、途中で車をすててあとは歩くべきである。歩いてこそ原始景観の美しさが味えるというものであろう。白根山の火口まで車は行かないが　老人も女も子供もよく登っている。箱根樹木園は車をすてて五〇〇米～一〇〇〇米歩くことになっている。それだからこそほんとうの姿が味えるのである。

さてこのような時代になって　今こそどんな小さな原始景観でも残すべき時である。原始景観でなくともよい。市街地近くに　栗ひろいの出来る山　茸取りのできる林　子供のためにカブトムシのいるところなど住民の健康のために残してもらいたいものである。しかしそれも殆んどが喰いつぶされてしまっている現在である。

そこで　次の代に備えるためにごく身近な生活圏内に　市街地にも緑を造成しようではないか。原始景観でなければならないとか　自然林ではないといって目をそらす必要はない。遠い原始林より近くに緑の楽園を数多く造成しょう。明治神宮の森も人工林である。

それにはまず　鎮守の森を育ててフルに活用すべきである。次に出来るだけ身辺に共有地を確保し　そこに木を植えて住民の手で育てることである。その植樹はきわめて自然の雰囲気のでるように配置しなければならない　そしてその樹間に灌木をあしらい下草を育てるのである。この林は原則として林床の落葉は取り去らない。いくつもの歩道は設けるが車は近ずけない。時にベンチも必要であろうしブランコやすべり台もあるが動力付きのものは排除する。素朴さを失ってはならない。

身近にあるから好きな林を誰でもいつでも気楽に散策できる。敢て『庶民の森』と呼びたい。子供のころからこうして育てた林はきっと人の心に泌みつき親しまれ　やがて異郷にあっても想い出すようになることであろう

次にここに植える木や草は　よそ物であってはならない。常日ごろ見なれた近くの山のものばかりがよい。それだけに育ちもよい筈である。集団移住をした人たちが郷里から苗木をもちこんだ例は少くない。よそものだけが貴いと思うのは自分を卑下する劣等観に外ならない。

このような緑の計画は同じ地域に数個所えらび　その各々は樹種をかえて　あるものは純林に　あるものは混交林にと趣向をかえ中の灌木や草花にも変化をもたせ特徴あるものにする。その土地でなければ見られない独特の持味のあるものに育てることである。

また信州は高いところに針葉樹林がみられるが　生活圏の大部分は落葉樹林帯であることを忘れてはならない（但アカマツ林は別）したがってこの造成林は主として落葉樹林とすべきである。落葉樹は四季の変化に富んで住民の心のうるおいを増すことになろう。旅の人にも四季折々を楽しんでもらえるのである。さらに落葉樹林こそ小鳥の好んで住みつくところである。

次に市街地にはつとめて街路樹を植えようこれも町並によって樹種を換る事が望ましい

また各地で団地造成が盛んであるから　これには新規計画ですぐにもできる。特定の樹種をきめて植込んでおけば　緑ゆたかな住み心持よい健康的なものにすることができる。こうして各地で　○○街・△△通り・××団地といった愛称のできることが予想され親しみも一層増すことであろう。

これは市街地や団地ばかりではない。土地に余裕のある農村部でもこの計画をすすめるべきである。各部落が計画的に樹種をきめて育てるのである。これがこの土地の産業に結びつけばそれこそ理想である。特徴ある緑の農村をつくることである。急ぐことはない。ここで百年の計をたて信州いたるところに郷土色ゆたかな緑の楽園の誕生を念願して止まない。やがて信州全体が一大観光地として極めて特色あるものになること疑いない。

現在信州でこのようなところがないではない。例えば　軽井沢のカラマツ林　森のアンズ　飯田のリンゴ並木等々全国的に知られているものがある。このほか高遠公園のコヒガンザクラの純林は百年の古木から植継ぐ苗木はすべて同一種とすることに町当局は努力を重ねてきている。信州大学本部前のケヤキ並木も数多くはないが特徴あるものになるに相異ない。また飯田市山本では分布の限られた珍種ハナノキが小学庭でよく種を結んでいるこの苗木をつくって各戸に植えようという計画のあることをきいている。やがてハナノキ部落の誕生することであろう。

大町市は中綱湖付近に自生するエゾヤマザクラの増殖を計画している。やがて森のアンズに負けないエゾヤマザクラの里としての名所が出来るであろう。

免に角こうして自分らで育てた　その地方独特の持味のゆたかな緑が信州各所にできれば　今迄の劣等感は優越感に替り　郷土への愛情は増し満足できる時代がくることであろう。＝九月三十日退稿＝（信濃生物会会長）

平林武夫さんを偲んで

清水悟郎

亡くなってあなたは—

「亡くなってあなたは、私の生命のうちに永遠者の大いなる悲しみを遺した。」—これは、東洋の詩聖とうたわれたタゴールの詩、「愛する人の贈物」の冒頭の一句です。「わが愛する人は死んだ、私の心に大きな悲しみを遺して……。だがその悲しみは、私の生命の一部となって、あなたとともに永遠に生きつづけている。」というのでしょうか。これは相愛する男女の仲についての事ですが、さて平林武夫さんは、先生を知り、先生を愛する人々に何を遺されたでしょうか。

平林武夫先生、いや、そう改まって言うよりも、武夫さ、もっと略して武さと呼ぶ方が（事実誰れからもこのように親しく呼ばれていましたし）、この人の情味あふれた人間性にふさわしいようです。学生時代陸上競技の選手、長野県における登山、スキー、サッカーの開拓者、そこで鍛えぬかれた強固な意志と体力の持主、生徒からも同僚の教員からも慕われ頼られた包容力と実行力の持主、御前講演で陛下まで笑わせたというユーモアに満ちた話術、油絵もたしなめば短歌ものにした豊かな才能、しかも信ずるところは容易に曲げなかった気骨の持主、教育者として、また一箇の人間として、武夫先生ほど人に愛され、親しまれ、頼られながら、周囲をいつも明かるくしてくれた人はおそらく近来まれだったにちがいありません。そんな先生の死ほどまた突然なものはなく、先生を知るほどの人で、耳を疑わなかったものは一人もなかったと思います。全く、今もって信じ得ぬことひょっこりサブリュックでもかついで、「おれ死んだって？なにをごたこいているだ、ちよっと一人で針の木へ行ってたんだよ。」と八日町の角あたりを、人なつこい微笑を浮かべながらひょうひょうと歩いているような気がしてなりません。こんな先生の死をタゴールに模して言うならば、「亡くなってあなたは、愛する郷土の山と人々の胸に永遠の微笑を遺した。」とでもいうことになりましょうか。あまりにも突然なその死、その直前までの笑顔と人間的親和力、それが何と不思議にも、遺された人々にむしろなつかしさをもって、思い出をよみがえらせることでしょう。

中山スキー場と武夫先生

中山スキー場（今の大町スキー場）は武夫先生が中心になって、和田茂喜治、赤羽純信先生に私なんかも加わって、毎週土、日、木を伐ったり、ジャンプの練習台を造ったりして整備したものです。昭和四、五、六年ころのこと、小屋は掘立小屋が一軒だけ、スキーは単板でエッジなしのフイットフエルト式、スキーの帰りに仁科楼（そば屋）へ寄ると、「先生たち、寒いのにまたオスベリかね。」などと言われた時代、また東山スキー場を百瀬慎太郎さんたちと作り、小早川隆邦氏（「銀盤に描く」）を呼んで初めてスキー講習を開いたのもそのころのこと、昔物語ながら、大町のスキーの開拓者として忘れてはいけない方です。

八方尾根初滑降と武夫先生

武夫先生と和田、赤羽、私の四人が平川側の斜面を登って八方の避難小屋（八方池のそばに今はその跡だけがある）に一泊、小屋は利用者も無くて天井まで雪、しかも夜に入って吹雪、一睡もできなかったが、翌朝は全くの快晴、目もまばゆい新雪の斜面を、そのころの事とてボーゲンと直滑降で数十回も転倒しながら降りてきた。昭和六年二月のこと、当時大学山岳部の誰れかが降りていたかも知れないが、あるいは八方尾根スキー初滑降かも知れない。首謀者（？）はもちろん武夫さ一通りの装備はしていたが、今想えば遭難もの に近いが、みんな体力気力が充実していたのですね。

針の木雪渓上の勧進帳

慎太郎祭の発起人としても武夫さは忘れてならない人ですが、ある年の事、用意してきた祭文を読む段になって、武夫さの曰く、「いけねえ、いけねえ、どっかへおいてきちゃったぞ。」と言いながら、すぐまた「いいわいいわ、やい清水さん、スケッチブックの画用紙一枚破いておくれや。」そこで私が紙をあげると、それを巻いて手に持つと、祭壇の前でうやうやしく祭文朗読、富樫ならぬ祭神の慎太郎さんも、定めて苦笑しながら聞いたことでしょうが「山を想えば人恋いし」の慎太郎さんのこと、この傑作を喜ばれたにちがいありません。たしか美江ちゃんも、「平林先生らしいわ。」と言われ、みんなで大笑いしたことを思いだします。

慎太郎さん遺稿集（「山を想えば」）と平林先生

槙有恒先生監修のこの本の出版は、実質的には平林先生の献身的な努力によるものでした。慎太郎さん亡きあと、針ノ木小屋、大沢小屋の経営の事、山岳会や慎太郎祭の事などで、どれだけ御遺族の方や地元の人たちから力にされていたことかを見聞しながら、その友情の深さや仕事に対する熱心さ、企画性と実行力に心をうたれたことでした。損得勘定の全然ない人として、誰れからも愛され頼られていた人でしたのに……

画才、文才、話術

先生の座談のうまさ、おもしろさは定評のあること、大体肩のこるような事はきらいでおそらく人の肩もこらせるような事は生涯しなかったと思うのですが、画才、文才もなかなかのものでした。昭和五年、先生を中心に大町スキークラブが結成されましたが、そのバッジの図案は先生、慎太郎祭参加章の図案もほとんどが先生のものでした。ある年のものに、金のひょうたんをあしらったものがありましたが、それは佐々成政が軍用金を針ノ木峠の道のどこかに埋めたという伝説にちなんでのもの、「きっとどこかにあるずらに、みんなに見つけてほしいというわけです。」と、そうした奇抜な着想の持主でした。

武夫先生今や亡し。しかし、いつまでもそれを泣き悲しんでいると、「みんななにが悲しいだ？」などとおこられそうな気もしますそんな先生のために、来年は追悼記念登山でも行って（ちょうど慎太郎祭も第十五回になりますし）霊を慰めたいと思いますがいかがでしょう。どこかの山の頂上か雪渓のほとりお花畑の近所に、いつまでも生きていられて「よう、みんなも来たか。」とほほ笑みかけてくれそうな武夫さのために……。

（松本市里山辺上金井）

在りし日の平林武夫さん（写真中央左）
一九六八・六・九 慎太郎祭にて

山と博物館 第16巻 第10号
一九七一年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二一一 大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一二三、二九三）